

旅の研究者にとっての修学旅行等の記憶の効能

● 小 川 功

1. はじめに

平成30年12月15日跡見学園女子大学で開催された学会行事の一環で立教大学の溝尾良雄氏のご案内で文京区内の街歩きに参加した。本郷界隈の散策の折、鳳明館台町別館の前で「地方から上京した修学旅行の生徒等が多く宿泊した老舗旅館」との説明を受けた。レトロな玄関を拝見するうち、筆者も中学修学旅行の折、この場所での特別な出合の情景を鮮明に思い出した。約60年前の昭和36年当時はまだ新幹線もなく、東京～大阪間は急行で8時間以上要した。商用出張ならともかく並の小・中学生が箱根の関を越える機会¹⁾はザラにはなかった。当時の東と西は互いに言葉・風俗・習慣を異にする“独立の国”で、関西弁集团の中で唯一人異国語の如き流暢な江戸弁を捲き立てる部活のN先輩を筆者は感嘆の眼差しで見ている。庶民レベルでの頻繁な草の根交流は39年新幹線開業、45年万博等による“壁”の撤去を要した。そんな貧しいコミュニケーション文化の時代に“壁”をブレイクスルーできる絶好の機会が全員参加型の修学旅行であった。

記憶では鳳明館玄関を出立直前の筆者はどこかで見たことのある如何にも裕福そうな初老の紳士からソフトな和歌山弁で「Mは居りまっか？」と尋ねられた。実は筆者も自由行動時間を利用して道不案内な東京の親戚宅を一人で都電に乗り初訪問すべく緊張中で、心配した祖父が可愛い孫を迎えに来たM家の同様の事情を察知、気安く同級生M君にその旨伝えに行った。最近同級生河口正隆君（某一流家電メーカー出身）と昔話中、業界で著名なM翁が孫を訪ね鳳明館に来たことがあると言い出した。やっぱりあの老紳士は“経営の神様”その人であったか…と思い返した。本稿で乏しい記憶の典拠とした、転居転職震災等を乗り越え辛くも手許に残った半世紀以上前の資料・文献等を略号²⁾で示した。また大昔の黑白写真アルバムを探し出しご提供下さった小田忠文・小倉正敏両君を始め多くの同級生各位の記憶喚起への親身なご協力に深謝する。

2. 小学校6年の修学旅行（昭和32年11月6～7日）

事前に配布されたガリ板刷りながら、上質紙に印刷された、今日的にも綺麗な18頁もの詳細な葉1によれば旅行日程（以下時代を痛感させる経費も努めて掲載）は以下の通り。

11月6日（水）6：30 公会堂集合、大型バス4台（近鉄バス@170円往復）で出発。8：20 近鉄上六発「3車両4組（本校割当3両）の貸切電車（@203円往復）。10：30 宇治山田着「下車して外宮へ向い」（葉1）外宮参拝。11：40 三重交通バス（@170円往復）で外宮前出発。11：55 内宮着 内宮前岩戸屋で昼食、宇治橋を渡り（卒アル1）、伊勢神宮の内宮参拝。15：00 内宮参拝後、三重交通バスで内宮前出発。15：20 旅館二見館着、水族館（卒アル1には海洋博物館）見学（@7円）。三重交通神都線終点「二見電車停留所」（葉1）に近接し、海岸に面した和風木造旅館二見館（卒アル1には賓日館二見館別館）泊（@350円）。食糧管理法が厳しい食糧難時代なので、生徒全員前日の用意として米4合「夕食1.5合朝食1合昼食1.5合」（葉1）持参が義務づけられていた。宿舎での注意として「特に当日、本校の他に大人の団体が泊まっている」（葉1）。18：30 昼敷「大広間120帖」（卒アル1特集2）で夕食後海岸通～夫婦岩を自由行動。

21:00 筆者は「鶴、松、梅」で就寝。

7日(木) 6:00 起床。夫婦岩を見つづつ日の出拝(卒アル1)。7:30 朝食。9:00 二見館大型バス4台で出発。9:20 鳥羽着。徒歩で「船出の天気を見た」(栞1) 日和山(標高68m)。10:30 鳥羽港あやめ丸(定員320名、@56円)で島めぐり。同級生の山崎文昭君に撮ってもらった貴重な記念写真「鳥羽浦めぐりの船中にて」(アルA)。11:30 真珠島(パールアイランド)着、「真珠島入場」@10円。12:00 昼食後、島内の「真珠工場及び海女の作業を見学」(栞1)、「最近なくなられた御木本幸吉」(栞1) 翁銅像前で全員写真撮影(卒アル1)。14:00 真珠島発(渡船@5円)。14:40 鳥羽駅前三重交通バス4台で出発。体調には留意して「持物、薬エメリン錠、マステゲンB12錠(ビタミン剤)、ムルチン錠(感冒剤)、メンソレータム、ほうたい」(メモ)を持参し、「食事がおわったらすぐねる」(メモ)を肝に銘じるも、後半風邪でダウン、看護教員に迷惑を掛けるなど散々だった。しかしバスから見える参宮道路脇を走る神都線の可愛い小さな電車がゴロンゴロンと並行して走る姿だけは強く記憶する。15:20 近鉄宇治山田着。15:40 近鉄貸切電車で宇治山田発。「前日の用意」として「みやげもの予約」(栞1)となっていた通り、「車内で旅行出発前申込のみやげ分配」(栞1)。筆者の巻末メモ欄に「予約のおみやげ 御福20コ入1箱 和=二百五十円也」と記入。費用総計@1100円、「おこづかい二百円まで厳守」(栞1)と書かれ、メモ欄に自ら「二百円のおこづかい守る。むだづかいをしない。節約する。つまらぬみやげをかわぬこと」と記したのに土産代は高価。「間食パン配給(一人味つけ2コ)」@20円。17:46 近鉄上六着。18:00 上六近鉄バス車庫前大型バス4台で出発。19:00懐かしい表記の「省線芦屋駅北口前」着、解散。

3. 中学2年生の社会見学旅行(昭和34年8月3~7日)

大内淳三郎、橋本武、久保田幸夫3先生が主宰、@4,000円(追加で100円)徴収し、新聞会館ツーリスト野崎氏の手で国鉄団体旅行(@920円)で実施、「生徒1人当たり支出計4,047円」であった。恐らく鉄道方面の有識者と察する久保田先生手作りの栞2と決算報告に詳細が記され、また旅の直後に筆者が書いた未定稿(信濃)が残っていた。

8月3日21:50 三ノ宮駅中央降車口集合。22:23 三ノ宮発。

4日5:56 豊橋着。6:00 豊橋発 駅弁(@100円)。7:44 中部天竜着、バス(2500円)で佐久間ダム見学。10:20 中部天竜発。15:05 辰野着。15:24 辰野発。15:52 上諏訪着、ヤシカカメラ工場見学。ヤシカ~旅館バス(1000円)。南湖荘泊(@500円)。

5日6:12 上諏訪発。6:58 小淵沢着。7:12 小淵沢発、小海線「富士見峠からの富士展望(列車から写す)」(アルA)。10:50 小諸着、懐古園見学では古老の案内あり、「オジイさんはこの旅情の歌の中にある…佐久の草笛をふいてみましょうと…手づかの草の葉を器用にまるめて、ピーとやりだした。なんともいえないものがない音…深い深い懐古の情が底から底からこみあげてきて…古き時代にさそいこむ」(信濃)と感激。「千曲川の展望-懐古園の展望台より」(アルA)を満喫、日記に懐古園の絵地図も書き残した。帰りに「みやげものの店では…藤村最中…藤村センペイ」(信濃)と藤村を食物にする商魂の下劣さに「驚き!!」(信濃)興ざめ。12:51 小諸発 準急「白樺」(小諸~軽井沢60円、準急券70円)。13:29 軽井沢着。珍重すべき現役ラックレール見学に際し認識不足の当時の筆者も「これから歩いてアプト式鉄道を見学するという。皆は『暑いのに三本レールなんか見んでもええのに』等と…何のことはない。ただ二本のレールの間にギザギザのついたレールがもう一ちょうついているだけで…どうせ写真にうつしても三本レールがうつるだけだからオレはうつさなかった…みなやれやれ、しん

どいだけやったな、などとブツブツ…途中オーメンがアサマの写真をとったのでオレもとった」(信濃) 代替品が「東急所有池より浅間を望む」(アルA) 写真。「こんどは草軽電車とかいうのにのる…草軽の軽井沢駅についた。大きさは神戸電鉄の有馬駅位である…十四時四十分の電車にのる…軽井沢駅でだいぶ長い間まった」(信濃) 後、14:40 新軽井沢発草軽電鉄 (@168円) 乗車し、鉄道の概念を根底から覆され驚愕絶句。「草軽電車の快適さ、スマートさ。18世紀的!!」(アルA) と皮肉を込め記し、18:15 草津温泉着、賽の河原や湯畑(硫黄採取場) 見学。萩原旅館泊 (@500円) +弁当 (@90円)。

6日7:30 草津温泉発、草津～万座 草軽電鉄バス(通行料共12,400円)。9:30 万座着、温泉街見物中に東京方面からの華やかな女子学生団体と遭遇したのを記憶。10:30 万座発、徒歩で白根山麓より熊ノ湯まで14km。「渋峠より北アルプス連峰を望む」(アルA)。15:00 バス(5,720円)で熊ノ湯発、17:00 湯田中着、島屋旅館泊 (@500円) +米代 (@4円)。

7日8:16 長野電鉄 (@80円) で湯田中発、草軽と比べ「長野電鉄の電車は…茶色で車体はましかく…感じは20世紀的にスマートに見えた…一昨日、まことに快適でスマートで、振動のほとんどない十八世紀的な草軽電車に三時間半ものらしてもらったから、この電車がほんとうにたのもしく見えた。(五倍ほどだろうか) …車の中はマアママである。(コレモイツニ草軽電車殿ノオカゲ、アリガタヤアリガタヤ) ロマンシートではないが、草軽ホドデハナイ。(草軽を比較ニモッテキタラ、ドンナ電車デモヨクナル。草軽サンオコラナイデクダサイヨォッ)」(信濃) と極限の低規格・草軽から受けたカルチャーショックの甚大さを告白。9:21 善光寺下着、善光寺参拝(拝観料@50円)、昼食 (@100円)、善光寺～長野駅バス(630円)。12:50 長野発、準急「しなの」(準急券120円)。「日本三展望の一 善光寺平を望む。はるかに千曲川、川中島」(アルA)。18:32 名古屋着。18:40 名古屋発、準急「比叡」(準急券120円)。21:51 三ノ宮着。

4. 中学3年生の修学旅行(昭和36年3月15～19日)

3月15日葉3によれば7:23 三ノ宮駅発急行『霧島』で15:29 熱海駅着とあるが、「運悪く国鉄のストライキのため出発が一時間も遅れたが、それでも四時すぎに熱海駅につき」(池田)。西武系列の伊豆箱根鉄道の貸切バスで15:40熱海発～●十国峠自動車道～17:30箱根町●「湯の花ホテル」着(泊)。

16日箱根は季節外れの大雪で一面銀世界、旅館の番傘を借りバスに乗車。8:00「湯の花ホテル」発～雪の大涌谷見学～湖尻～●芦ノ湖遊覧船(双胴船「くらかけ丸」)～元箱根～●十国峠自動車道～●十国峠展望台(昼食)～熱海～伊東～16:00熱川・紫雲閣&みどり館着(分泊)。

恐らく前述の野崎氏が西武系を選択した結果、完全に西武系の非「ゴールデンルート」を行った結果、池田君が「説明がとてもうまい」(池田) と評したガイド嬢から熱川付近でトンネル工事中の伊豆急行(36年12月下田迄開通)など一切説明ない施設が多々あったのが不思議。当時の旅日記³⁾に「車の窓から見るとさかんに鉄道敷設工事を行なっている…もうかる事ならなんでも手を出す東急が、伊豆急行電鉄とかいう別会社をたてて国鉄線便乗で東京～下田間に準急電車を走らせるらしい。そうなると当然西武系の伊豆箱根鉄道(前の駿豆鉄道)や伊豆半島のバス路線を握っている東海自動車も負けてはいまい…僕らの乗ったバスは伊豆箱根鉄道バスだからガイドは詳しい説明の労はとらなかつたが。前の箱根にしても伊豆にしてもあらゆる観光地で東急と西武は犬猿の仲だ。その子会社同士でももちろんのこと」(箱根) と前年輕井沢での学習をも踏まえての観察ぶりは60年後と変わらず進歩なし。

17日7:30「紫雲閣」発～石廊崎(昼食)～下田～天城峠越～浄蓮ノ滝(の予定が「がけくずれ

で通れず…変更」(池田)。「水害の被害跡が各地に見られ」(池田) た33年狩野川台風の説明を受けた。「修善寺に着いた。ちょっと歩いて寺へまいったが、『修善寺物語』の静かな山の湯といったようなイメージとかけはなれて、俗化している」(箱根)とする理由を「伊豆箱根鉄道では東京から修善寺まで直通の準急電車が出ていて便利だが…東京から準急で次々とおしかけてくりゃ、俗化しないというのも無理」(箱根)と分析、当時の筆者は大資本による観光開発に懐疑的で、池田君も「日本の観光産業は節度が守られていない」(池田)と苦言を呈するなど共通の思いであった。堂ヶ島(昼食)海上遊覧船～●三津水族館(飛び跳ねるイルカショー見学、小倉君アルバムに1枚だけ真っ白な富士山がクッキリ写ったカラー写真が含まれ驚いた)～大仁～15:20 三島着。15:32 三島駅発～東海道線電車～17:10 藤沢駅着。17:24 藤沢駅発～小田急江ノ島線～17:35 片瀬江ノ島駅着。橋を渡って江ノ島岩本楼別館着(泊)

18日7:00 岩本楼発、「真白き富士の峰」の唄と同世代・湘南中学ボート部員の悲話を聞き涙。鶴岡八幡宮～鎌倉大仏(全員記念撮影)～羽田空港(昼食)～国会～東京タワー(全員記念撮影)等都内見学。犬塚京一君は空港の制服姿に感激、小倉君も空港ビル、ノースウェスト機を撮っているが、鉄道でないためか筆者には記憶なし。しかし国会「見学できるようにしてくださった」(印南)精力的な風貌の地元兵庫一区選出首藤新八代議士が大声で演説(?)されたのは覚えている。商売柄国会図書館に日参する都度同様の情景に接する故かも知れない。17:00 文頭の鳳明館台町別館着。夕食後自由行動で区内の親類を訪ね、都電江戸川橋電停で祖母の兄の出迎えを受け初対面ながらご面相を一目見てこの人と確信し声を掛けたが、相手も同じ感想を述べられた。

19日8:00 赤門前バス発～都内見学、二重橋(全員記念撮影)～10:30 東京発急行「雲仙」車中昼食～19:51 大阪駅着・解散。

5. 高校2年生の卒業旅行(昭和37年11月8～16日)

栞4所収の旅行日程表によれば船中2泊、旅館6泊で、生徒215名に6教員と「神戸新聞会館旅行案内所」の野崎、横尾両氏が添乗。「班別表」によれば3組の筆者は8名の17班に所属、アルバム委員とは別の旅行委員を拝命。

11月8日16:50 関西汽船待合室集合。17:30 修学旅行専用船わかば丸で神戸中突堤発、「夕食は携行」

9日船内で朝食。別府航路「船のボーイの恐ろしいこと！」(卒アル2)。8:00 別府港・関西汽船棧橋着。8:20 別府港から亀の井バス4台に乗り込む。10:00～11:00 宇佐八幡宮見学。幸いに駐車したのが【写真-1】の大分交通宇佐参宮線(3年後の40年8月廃止)宇佐八幡駅前、珍品を見つけた同好の岸元君らと車庫前に憩う古典客車群の居並ぶ偉観や日立製ディーゼル機関車D22が貨車を牽引する入換作業を觀賞⁴⁾、由緒ある神社より有難がった。11:40 中津着、13:40～14:40 耶馬溪・羅漢寺・青ノ洞門等見学。15:40 豊後中村着。途中横尾氏に教えられ見事な大岩扇を望見。17:00 由布院着、金鱗湖見学。現在大人気の由布院をゆかりの油屋熊八⁵⁾創業の亀の井バスで先行訪問した歴史的体験なのだが、ガイド嬢説明も記憶になく、当時の感覚では失礼ながら数あるトイレ休憩地の一つ程度に捉えており、観光学徒として自らの不明を恥じるほかない。17:50 後に研究対象とした別府観海寺⁶⁾着、「観光ホテル」泊。

10日8:00 観海寺発、坊主、鬼山、魔の淵等の地獄めぐり、10:30～11:30 高崎山サル見学、弁当で野外昼食。15:00～16:00 阿蘇山の噴煙を「待て一寸死ぬる気持ちで生き抜こう」の警告を見ながら間近で見学、17:15 栃木温泉着、「奈落の底」(卒アル2)にある小山旅館泊。

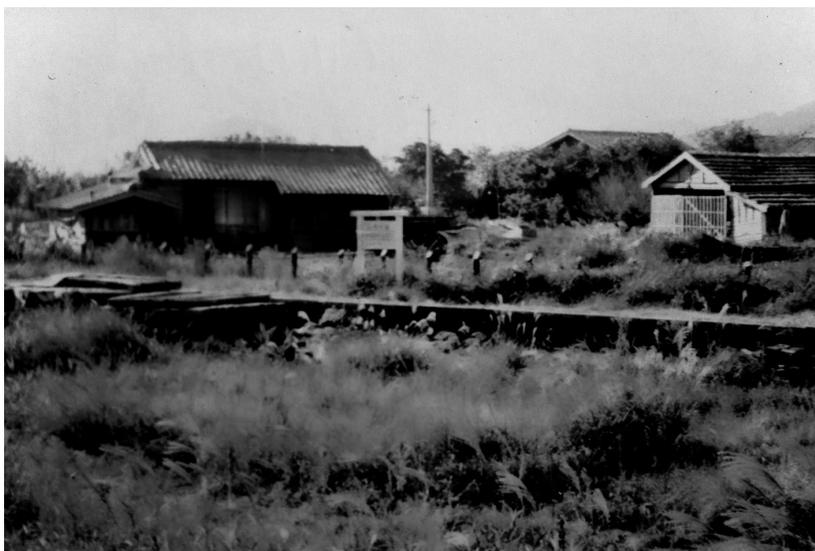
11日8:00 栃木温泉発、11:00 高千穂峡着。橋の上から峡谷を望見。13:00 高千穂峡発、



写真－1 USAの鉄道と遭遇（昭和37年11月9日岸元君撮影）

18：00 宮崎着、宮崎市吾妻町の待月旅館&清流荘に分泊。

12日 8：00 宮崎発。「天孫降臨の地」宮崎に昭和15年建立の巨大な平和（旧「八紘一字」）の塔見学。不気味な異様に撮った写真には「紀元二千六百年」（小田君アルバム）と刻字。日南海岸へ。9：20～40 サボテン園見学。10：20～11：30 青島の枇杷樹、鬼の洗濯板見学（全員記念撮影）。37年7月南宮崎～内海間を全線廃止し僅か3ヵ月余しか経過していない【写真－2】の旧宮崎交通線終点内海駅の微かに「うちうみ」と読めそうな駅名標もそのまま、外された枕木が積み上げられた廃墟の前を偶然通り車窓から撮影、また翌38年5月開通の国鉄日南線（南宮崎～北郷間）敷設工事も撮影できた。宮交から日南線へ交代する僅かの幕間に偶然現地を訪れ、歴史的瞬間に立ち会えたと満足。11：35～12：30 宮交のユニークな遊園地「こどもの国」入園、教員ともども童心に返り楽しんだ後、未舗装の有料道路を砂埃を立てつつえびの高原へ。16：30 霧島温泉着、旅館「霧島館」（始良郡牧園町）泊。夜に各班対抗の隠し芸など「演芸会」（卒ア



写真－2 宮崎交通内海駅の廃墟（昭和37年11月12日筆者撮影）

ル2)を好評開催。

13日8:00 霧島温泉発。8:30 霧島神宮着、参拝。11:10 袴腰着。熔岩道路経由。11:20~12:50 バスのままフェリーで鹿児島棧橋着。12:55 鹿児島棧橋発、13:10~13:40 城山公園見学。和服を召され風貌も西郷どんそっくりの名物老人(近傍の店主とも)の名解説に聞き惚れ、“西郷”老の音頭で全員「桜島を吸い込む」(卒アル2)。15:30~16:30 突端の長崎鼻で開聞岳等望見。池田湖や道路と並行する鹿児島市電谷山線を車中撮影した。18:00 鹿児島着、仲町「白水館」泊。

14日8:30 鹿児島発。12:00水俣着。途中、バスがトイレ休憩したのが国鉄阿久根駅前であったため、これ幸い同好の小田忠文、岸、三宅正太郎の諸君と駅舎で撮った。同様な行動は阿蘇、別府駅等でも行ったが、当時の我々の率直な感覚は墮落した観光バスに依らず「須く旅は鉄道に依るべきであって、まず国鉄の駅で記念撮影しないと旅行した気分にならない」という“鉄道至上主義”に基づく当然の作法であった。この発想を極限まで昇華させた快挙(愚行?)が4年後鉄道に乗り続け車窓から鉄道観賞、たまに降り駅前記念撮影&記念スタンプ押印なる日本一周鉄道旅⁷⁾での一連の日課である。12:30 水俣発。15:30~16:00 水前寺公園見学。16:20~17:20 熊本城見学。17:30 熊本市桜井・司本店泊。

15日8:30 熊本発。11:30 阿蘇大観峯着。昼食場所が[写真-3]の国鉄阿蘇(36年3月坊中を改称)駅近くで小田、清水政美両君と駅名のみ真新しいがレトロ感漂う駅舎で誇らしげに撮影、念を入れホーム駅名標でも撮った。もちろん草千里で全員で撮ったのだが、後で我々だけの絶景ポイントを見落とした仲間に「どや!この阿蘇駅で撮らんと阿蘇へ行ったことにならんで」と当世風“写真映え”を自慢。12:30 阿蘇大観峯発、16:30 別府着、自由行動で国鉄別府駅前で鈴間能成君らと例の記念撮影。前述の通り昭和30年代の大手私鉄の帝国主義的植民地獲得競



写真-3 阿蘇を訪れた証拠写真(昭和37年11月15日小田忠文君撮影)

争⁸⁾に興味津々の筆者は別府近鉄百貨店の大厦が周囲を睥睨する象徴的な姿を何枚も撮影、小田君アルバムにも「近鉄マークの真ん中に別の字を配した」社紋入り広告が写っていた。17：30 別府港集合。18：00 別府港発。復路も同じ関汽「わかば丸」に乗り込み、1週間も御世話になった素敵なガイド嬢（小倉君談「ぞっこん惚れ込んだ奴がいましたよね…男子校の純真さでしょうか」）の紙テープでの見送りを受けて涙の出航。
16日船内で朝食。9：00 神戸中突堤着、解散。

6. 与えられた観光デザインの解析

当時の教育旅行は昨今の課題探求型とは全く異なり、上から一方的に与えられた観光旅行であった。そこで当時当該旅行を主宰された側の意図・準拠した観光モデル等がどんなものかを一観光研究者として解析してみたい。まず小学校の伊勢参宮は当地、当該校の定番コースであって、当時の教員も型通り継承⁹⁾したにすぎないと思われる。しかしGHQが強く介入したはずの皇民教育排除が、講和発効直後に早くも伊勢参宮復活という形で崩れ始めたのは興味深い。

次に中学校の伊豆箱根も定番に近いが、当時の東急（小田急を含め）VS西武の箱根山戦争期において西武サイドの伊豆箱根鉄道¹⁰⁾のバスに乗って、●印を付した同系拠点など西武版“ゴールデン・コース”を忠実になぞる内容となっている。

高校の九州一周は別府港を起点に一週間以上亀の井バスに乗って創業者・油屋熊八の思い描いた通り、地獄巡りを始め由布院に立寄り、阿蘇に登り、九州横断道路等を走り、案内嬢の名調子に酔った推奨コース¹¹⁾そのものとなった。すでに部活で自立型観光¹²⁾の味を知った筆者らは推奨コースから外れて独自に見所探索に努めたことは前述の通りである。

最後に全員参加でなく自由参加型であったが、有志教員が呼びかけた中2社会見学旅行は定番コースを外れ、飯田線、アプト式、草軽等かなり「趣味的」（栞2）な教育旅行であった。具体的にどの恩師のご趣味を反映したかは不明ながら、筆者は立案教員の密かな意図にもの見事に嵌められ、極論すれば一生涯の方向性¹³⁾を当該旅行で浴びたレール際の鉄分の“放射能値”で決定づけられたといっても過言でなからう。教育旅行のもたらす効能（あるいは残留後遺症）たるや真に恐るべしである。

むすび

昭和初期に油屋熊八の思い描いた観光デザインを数十年後に現実に享受出来たこと、小諸や鹿兒島で古老の今風ボランティア・ガイドの名演技に聞き惚れ往時を偲んだり、注記の如く観光・鉄道領域でのその後の調査研究の契機を与えられたことなど、筆者が教育旅行の諸体験から頂いた学恩にまずもって感謝申し上げたい。鉄道に興味を抱き始めた筆者ですら噂に聞いた華やかな軽井沢の名所を一瞥せずアプト式見学との講釈の下、ただレールが3本並んだ殺風景を見るため何十分も炎天下を歩かされた真夏の行軍を愚痴るのだから、一般生徒の拒否反応や推して知るべし。その後不思議な巡り合わせで同じ教員の立場となり、とりわけ本学では遠隔地との地域連携¹⁴⁾の一環で学生たちを煌びやかな都会を離れた草深い現地に因果を含めて誘う教務を担った身として恩師の労苦は身に染みる。多忙の中で作成頂き配布された「旅の栞」の時々刻々の具体的記述が、今回60年前の微かな記憶を呼び戻す過酷な脳トレ作業にとって唯一の頼りとなった次第である。また小学校時代の稀観資料として文集『わかぐさ』各号がある。昭和26年3月牧野先生が生徒の作文指導に当たる文芸部担当の時、成果発表の場として最初は「薄っぺらなもの」¹⁵⁾で創刊されたものである。当時盛んだった「綴り方教室」の母校での実践例かと思われるが、文字通り

の拙文が相当数収録され、お蔭ですっかり忘れていた当時の幼い心情が忽然として甦った。今回多くの同級生に筆者の“卒論”査読を頼んだら物持ちの良さに感嘆されたが、単に“ゴミ屋敷症候群”に過ぎぬ。唯楽しかった旅の追憶を残したい一心で数十年間廃棄を迫る内外の諸圧力に逆らい愛蔵し続けられたのは奇跡に近い。

25年間の教員生活を平成の終焉に1ヵ月先がけて終了するに際しここに一言懺悔しておく必要がある。麗々しく教育旅行の意義を説いた身として恥しい限りだが、一度筆者は病欠、体調不良でなく遠足を自発的にエスケープした前科がある。単なるズル休みならともかく、この真相は良心的兵役拒否に近いだけに深刻である。36年7月1日開園した奈良ドリームランドへおそらく36年11月ころ高校1年の秋の遠足で訪れた際、かねて計画通りドリームランド鉄道の駅舎を兼ねた入口でどきどき紛れに入場せず、より教育効果があると信じ奈良市内の社寺を心ゆくまで参拝した。そしてバスに乗車する集合時間間際にランド入口に舞い戻り、三々五々園内から出てくる同級生の列に何食わぬ顔で紛れ込んだ。理由はランド経営者の松尾国三への根深い個人的反感に起因する。彼の経営する観光企業は母校の小学校裏手に「芦山荘」なる“高級料亭”を営み、大規模な温泉開発¹⁶⁾に着手、念願のプールを寄付金を募ってやっとのことで竣工させたばかりの小学校PTA側と激しく対立した。小学生とはいえ筆者は深刻な対立の背景をほぼ理解し、教育環境を破壊する横暴な観光資本に対する敵愾心に燃えた。悪名高き松尾が捏造した“俗化の極致”奈良ドリームランドなど教育旅行の目的地たり得ずと強く信じ入園拒否した次第である。

しかし約50年の歳月を経て逃亡した罪、隠し抜いた罪を贖うべき因果は巡り、時の恩師のご厚情を欺いた咎めは我と我が身に厳しく祟った。即ち本学で観光経営論等を講ずるに当たり、我国テーマパークの魁として奈良ドリームランドに言及せねばならず、また研究者としても奈良・京都など古都をも大事なフィールドとする以上、時の知事が誘致した反面で「奈良の恥」とも囁かれる同園の功罪判定を避けて通れなくなった。「しまった。あの時素直に入園しておれば…」と悔やんでも後の祭り、当時の遠足で真前まで行ったのに、観光学徒として千載一遇の好機を自己の頑な極まる偏見が災いし“長蛇”を逸した次第である。不思議にも同園で行楽体験した同級生からは「バスで行ったことだけ覚えているが…」(犬塚君)程度の反応しかなかった。浦沢直樹の『20世紀少年』(昭和45年の大阪万博に行けなかったことを隠すためについた嘘をテーマとした本格科学冒険漫画)ではないが、今回岸君から寄せられた「奈良のドリームランドなんかに行った？記憶にありません」との感想通り、幸運にも行けた者の記憶は薄れても(筆者も密かに行った肝心の奈良の社寺の名前はとんと失念)、行けなかった(筆者は反博派と同様な敢えて入園拒否派だが)者の方はトラウマとなって永久に忘れないものかも知れない。その結果奈良ドリームランドに関し開園当初を知らぬ浅学非才否曲学の徒ながら若干の恥知らずの考察¹⁷⁾をモノにした。これこそ旅の研究者にとっての修学旅行等の記憶(欠落・不存在を含む)の効能(意図せざる効能)でもあろうか。

- 1) 幸いなことに筆者には小学校4年の昭和30年新宿に泊って、新日本観光経営のはとバスで絵画館、泉岳寺等の名所や、建設中の丸の内線などを車窓から見た東京見物の数少ない経験があった。しかし当時配布されたはとバスのパンフレットを後生大事に保存し、人生の大事件かの如く麗々しく小学校文集に「東京見物」と題して寄稿したほどの出来事であった。(『わかぐさ』9号、30年9月)。
- 2) 教育旅行の第一次資料(新聞も筆者ら旅行者自身の直後の寄稿につき間接的伝聞に非ず)として以下を愛蔵。葉1…『伊勢志摩の旅 修学旅行の葉 1957.11.6~7』。卒アル1…卒業アルバム『思い出1958』昭和33年3月。葉2…『社会見学の旅 昭和34年8月3日~7日』および「社会見学旅行 収支決算報

告」、栞3…『昭和三十六年度修学旅行日程（伊豆・箱根・東京方面）。栞4…『高校卒業旅行の栞 昭和37年11月8日（木）～16日（金）』。卒アル2…『卒業アルバム 1964』。アルA…筆者個人用アルバム「立山ほか」。信濃…未定稿「信濃の旅」。箱根…紀行文、36年5月1日灘高新聞③（新聞部のポスト・畑好秀君から煽てられ寄稿）。池田…紀行文（同紙）。印南…紀行文（同紙）。併せて海外在住を含む同級生諸兄からアルバム等の資料提供を頂戴出来た。

- 3) 当時中学生の筆者には箱根山戦争直後の傷跡も生々しい現場を視察しながら、そこまでの深い事情は判明せず。中学3年生らしからぬ内容と怪訝に思われるかも知れぬが、父親が定期購読していた経済誌『財界』、特に三鬼陽之助主幹の私鉄トップ取材記事を読みあさっていた後遺症であろう。現在も観光資本に興味を抱いて飯の種にしている訳で、60年間の進歩が皆目ないのが恥づかしい限り。
- 4) 昭和37年2月現在の時刻表で宇佐八幡発09：54ないし宇佐八幡着10：30の列車に遭遇可能性があった。
- 5) 拙稿「湯布院・別府の観光開発の先駆者・小野駿一と油屋熊八」『滋賀大学産業共同研究センター報』2号、平成15年6月参照。
- 6) 拙稿「海と山のリゾート開発並進と観光資本家の興亡―大正期の別府土地信託、別府観海寺土地を中心に―」『彦根論叢』381号、平成21年11月参照。
- 7) 拙稿「50年前の日本一周の鉄道旅―現地調査旅行の再現可能性の検証―」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』23号、平成29年3月参照。
- 8) 拙稿「大手私鉄による地方私鉄の系列化のあゆみ」『鉄道ピクトリアル』418号、昭和58年6月参照。
- 9) 前身の山手尋常小学校6年生は昭和10年10月13日「参宮旅行」（『沿革年譜』『創立二十年誌』昭和28年12月、P44）に行き、昭和11年4月赴任した岡本校長も「伊勢参宮に行つて」（二十年誌、P30）と証言する。戦時期の中断を経て遅くとも昭和27年秋の小学校6年生の修学旅行の行先は「伊勢参宮…二見浦」（『わかぐさ』5号、28年3月、P38）であり、翌28年10月15日「秋、伊勢路の旅」（二十年誌、P92）、30年秋も伊勢（『わかぐさ』10号、31年2月、P55）であり、31年も11月7日～8日全く同一コースで伊勢志摩を巡っている。（『わかぐさ』11号、32年2月、P70）
- 10) 拙稿「明治・大正期の困窮私鉄再建と生保金融―豆相鉄道の資産継承会社の性格を中心に―」『彦根論叢』298号、平成7年11月参照。
- 11) 松田法子著、古城俊秀監修『絵はがきの別府 古城俊秀コレクションより』左右社、平成24年参照。
- 12) 小田君のアルバムには鹿児島 NHK 送信施設、長崎鼻灯台施設など、彼好みの独自立寄先が多数収録されている。筆者らの部活旅行の中味は拙稿「立山・熊野・出羽三山への通過儀礼『初山駆けの旅』」『コミュニケーション文化』12号、平成30年3月参照。
- 13) このまま墓場まで持って行くことになりかねない持病“鉄道依存症”の元凶・草軽に関しては拙稿「北軽井沢の観光デザイナー―草津軽便鉄道の構想を中心に―」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』4号、平成26年3月参照。
- 14) 拙稿「観光コミュニティ学部に於ける学外実習とPBL―会津、長野県、長野原等での地域連携プロジェクトを中心に―」『FDジャーナル』17号、跡見学園女子大学、平成30年3月参照。
- 15) 『わかぐさ』5号、昭和28年3月、P2。
- 16) 拙稿「観光デザインとコミュニティデザイナー―地方自治特別法下での“観光デザイナー”芦屋市の山地開発構想の挫折―」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』17号、平成26年1月参照。
- 17) 「遊園地における虚構性の研究―観光社会学からみた奈良ドリームランドの「本物」「ニセモノ」論―」『彦根論叢』404号、平成27年6月参照。せめてもの罪ほろぼしに廃園後の廃墟の外周を幾度も訪れて強者共の回向を心掛けた。